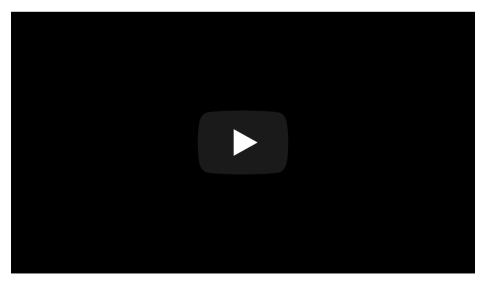
鳥よ 🛚



この末期においてなお思 在這盡頭終於回想起

い出す 私だけが知っていた鳥の 姿を 遥か遠き空のその何処よ りか 風を従えて舞い降りた 思えばはじめからお前は きっと 私を騙そうとしていたの だろう

お前のあの目が悪戯めき 笑う 若き日の私を誘うように

乞われるがままにその手 を取った ――その始まりを悔やめ ようか――嗚呼

私だけが知っていた鳥の 只有我知道的鳥兒的身影

從遙遠天空的不知何處而 來

隨風翩翩落下的樣子 仔細回想的話妳肯定從一 開始 就想要騙我了吧

妳的那雙眼神中暗藏着調

皮的嬉笑 像是要引誘那時年少無知 的我 宛若同情我似的牽起我的

——那樣的開端真令人懊悔

——啊

雙手

鳥よ 鳥よ そは空の何 処 この手引く先私を連れて 行く 鳥よ 鳥よ 翼持つもの よ その姿 けっして忘れえ ぬもの

鳥兒啊 鳥兒啊 汝在天空的何處 請牽起我的手帶我一同前 去 鳥兒啊 鳥兒啊 身懷雙 翅的妳啊 那身影 絕對不會忘懷 わたしが見上げる限りに お前は空を翔けてゆくの だろう 只要我還在仰望天空的話 妳就還會在那天空飛翔吧

流れる時さえも行く末知 らず ならばこの身をして何を 知りようか? お前と過ごした日々のそ の中に けっして戻らぬ針、刻む ことも―― それはきっといつか来る 定めの日 わたしだけがそれを受け 入れられずに お前のあの目が愁いに沈 **t**; 若き日の私を拒むように 乞うこともできずにその 手を離した ――唐突すぎる終わりの ときに――嗚呼

就連流淌的時間也不知何 去何從 那麼徒有這身軀又能知曉 什麼? 和妳一同度過的每日中也 有 被那絕不會倒退的時針戳 到的時候 那一定是命中註定必將到 來的某日 只有我遲遲不能接受那結 局 妳的那雙眼中愁苦而消沉 像是要拒絕年少無知的我 就連乞求也做不到 只能 撒手 ——這樣的結局實在太過唐

島よ 島よ どうか今一

鳥兒啊 鳥兒啊 還請再

突——啊

度 雲のあわい お前を探せ ども 鳥よ 鳥よ 翼持つもの ょ その姿 けして二度とは 見えず お前の居ない空は遠く どこか余所余所しいほど 處處都如此陌生而空虚—— に虚く――

給一次機會 即便要深入雲霄 探尋妳 的身影 鳥兒啊 鳥兒啊 身懷雙 翅的妳啊 那身影 決無法再有幸目 睹 沒有妳的天空是如此遙遠

「何故お前は」と問えど も答えなど無く 徒に時 重ねるまま お前のほかに誰が翼持つ だろう? たとい私にしか見えぬと 7

就算追問「爲什麼妳會」 也了無回應 唯有時光 徒然流逝 除妳以外還有誰擁有翅膀 呢? 就算只有我能看見亦可

この期におよんでこの目
卻逢此時映入眼簾的 に映る ――空より舞い降りた幻 想――嗚呼、それは!

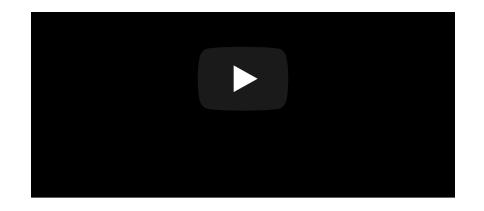
——從天而降的幻想—— 啊,那是!

鳥よ 鳥よ 何故今に

鳥兒啊 鳥兒啊 爲何事

到如今—— なって―― お前の目は 何も語らぬ 妳的眼中 不露絲毫神色 まま 鳥よ 鳥よ 翼持つもの 鳥兒啊 鳥兒啊 身懷雙 よーー 翅的妳啊—— その姿 よくぞ再びここ 那個身影 終於又再臨於 にーー! 此——! 鳥よ!鳥よ!さあ今一度 鳥兒啊!鳥兒啊!還請再 —次 この手引いて私を連れて 牽起雙手攜我遠走高飛 行け 鳥よ!鳥よ!翼持つもの 鳥兒啊!鳥兒啊!身懷雙 よ! 翅的妳啊! お前を けして離しはし 這一次我絕不會放開妳的 ない! 手! その空へと私も行こう 我也伴妳一同飛向那晴空 いま循環(空駆け巡)る 此刻化作騰空而上的疾風 風となって―― お前が空飛ぶときには 每當妳乘風翱翔之時 わたしも傍に居られるよ 願我也永遠伴隨在妳身旁 うにと――

文花帖 撮影曲1 風の循環 ~ Wind Tour(原 曲)



「凋叶棕」的「鳥よ」,原曲來自兩首「射命丸 文」在「東方文花帖」附錄 C D 中的主題曲, 分別是撮 影曲 1 「風の循環 ~ Wind Tour」和撮影曲 5 「風神 少女」。

選這首歌,其實是因爲我上週終於拿到駕照了(都 老大不小了方纔?),而這週卻沒有車能開,一直在回 味那種飛馳的感覺。

關於 文 的身世的講解,以後估計還會有別的歌詳述,這裏先賣個關子。

歌詞其實還算簡易,就只改換個別字詞表記標上註 音吧。

この 末期 に於 いて 尚 思 い 出 す たたし とり すがた 私 だけが 知 っていた 鳥 の 姿 を はる とお そら のその 何処 よりか に 鳥よ 鳥よ 鳥よ この手引く先 私を連れて行く に 高よ 鳥よ 鳥よ 鳥よ 鳥よ 鳥よ 高よ 高がた で ショ島よ が見上げる限りに まえが見上げる限りに まえが見上がる関けて往くのだろう

がれる時さえも行く末知らずならばこの身をして何を知りようか?お前と過ごした日々のその中に決して戻らぬ針 刻むことも――それはきっといつか来る定めの日れたし、私だけがそれを受け入れられずに

「何故 お前 は」と 問 えども 答 えなど 無 くいたずら とき かさ 徒 に 時 重 ねるまままれ の外 に 誰 が 翼 持 つだろう?

この期に及んでこの目に映る --- 空より舞い降りた幻想 --- 嗚呼、それは!

とり なぜ いま 鳥よ 鳥よ 何故今になって-お前の目は ゅた かた 何も語らぬまま とり つばさ も 鳥よ 鳥よ 翼 持 つものよ—— すがた ふたた その 姿 よくぞ 再 び ここに――! とり 鳥よ!鳥よ!さあ今一度 この手引いて私を連れて行け とり つばさ も 鳥よ!鳥よ!翼 持 つものよ! ^{まえ} お前を けっ はな 決して離しはしない! そら わたし い その空へと私も行こう めぐ かぜ いま空駆け巡る風となって―― わたし はた 私 も 傍 に 居 られるようにと――